

1 令和8年産「星空舞」栽培指針の一部改訂

令和7年度「星空舞」ブランド化推進協議会現地調査は場等で実施した調査・試験結果を基に、以下のとおり栽培指針を改定し、品質・食味の高位平準化を目指すための基本技術を提示する。

項目	これまでの実績・知見	令和8年産の見直しのポイント																					
1 収量・品質・食味目標	現行: 精玄米歩合 92%・玄米収量 500kg/10a・整粒率 70%・食味値 80 以上 ⇒ 現地では、現施肥体系においても 500kg/10a を上回る収量性を発揮しながら品質や食味も維持している事例もある。引き続き、収量目標を向上する目的の施肥改善が、ブランド力の基礎となる品質・食味に及ぼす影響を検証。	⇒ 現時点で変更なし。 (現地の積極的な増施による増収事例を収集しながら、品質及び食味関連の目標水準を高める取組みを継続。)																					
2 ほ場選定	現行: 雜草発生の少ない良質なほ場を選定し、日照が不足しがちな谷間での作付は避ける	⇒ 変更なし																					
3 生育指標 (標高適応性)	現行: 生育指標を達成する技術内容、標高別生育指標、標高 500m 程度まで ⇒ 今年度も高温条件下であったが、比較的収量水準が高く、目標収量を上回った調査地点の生育指標は特に平坦地で既存の指標より過剰傾向であり、整粒率が例年より低い傾向であったため、引き続き現行の品質・食味目標が達成可能な生育指標の限界を検証。	⇒ 現時点で変更なし。 (基肥増施等の施肥改善が、生育に及ぼす影響を確認しながら、収量性向上と品質・食味維持を両立する生育モデルの検討を継続。)																					
4 栽培様式	現行: 移植栽培のみとし、直播は行わない。高密度苗は可。 ⇒ 直播栽培に適性の高いきぬむすめ対比で、湛水表面散播において倒伏性等の栽培特性に問題はなく、移植対比で品質、食味に差がないことを確認(R5~7 年度)。	⇒ 改定 <u>移植(高密度苗含む)・直播等の栽培様式は限定しない。</u> ※ 但し、直播栽培は様式が多様で、雑草多発や収量減のリスクが伴うため、技術の本格導入前に指導機関へ相談の上実証のこと。																					
5 田植時期	現行: 平坦・中間地帯の田植時期は 5 月 16 日～5 月 31 日、山間地帯は 5 月上旬 ※ 晩植地帯では栽植密度を確保し 6 月上旬までに田植を行うことでくず米の発生を抑制すること。	⇒ 変更なし																					
6 栽植密度	現行: 植付株数坪 50 株～60 株 ⇒ 場内試験において坪 40 株で食味低下が懸念 ⇒ 疎植を避け、適正な中干しにより、幼穂形成期茎数・穂数を制御することで、品質や食味を維持する。	⇒ 変更なし																					
7 施肥 (分施体系)	現行: 全標高地帯で基肥窒素 3 kg/10a、穂肥 I・II とも葉色診断により施用 ⇒ 今年度の分施体系は、特に平坦地で基肥一発体系と比較してやや多収で整粒率がわずかに高くなる傾向であったため、基肥窒素増施により初期生育の確保を促し、高温条件下における品質向上と併せて、収量性の向上を目指す。	⇒ 現時点で変更なし。 (収量性向上に向けて基肥窒素増施の検討を継続。)																					
8 施肥 (一発体系)	現行: 窒素 6kg/10a(90 日タイプ緩効)、追肥は原則施用しない。 ⇒ 生育後半に葉色が低下した場合、追肥によって収量や品質が向上する事例があったが、費用対効果が不明瞭なことから、総窒素施用量の増量及び晚期溶出資材について効果検証を継続。	⇒ 現時点で変更なし。 (基肥一発による省力施肥体系確立のため、不足する窒素の追肥ではなく、基肥窒素増量や資材変更の方向性で検討を継続。)																					
9 刈取適期	現行: 標高 300m 未満・以上で区分 ☆ 標高 300m 未満; 有効積算気温 620～770°C・日 (積算気温 1000～1260°C) (青穂; 0～10%、穂水分 19～22%) ※ 但し、晚限付近の刈取は胴割や白未熟の増加リスクに留意 ☆ 標高 300m 以上; 有効積算気温 510～620°C (積算気温 920～1170°C) (青穂; 0～12%、穂水分 23～24%)	⇒ 変更なし <u>「星空舞」の収穫適期</u> <table border="1"> <thead> <tr> <th>標高区分</th> <th>出穂後日数 (日)</th> <th>出穂後有効積算気温 (°C・日)</th> <th>出穂後積算気温 (°C)</th> <th>青穂率 (%)</th> <th>穂水分 (%)</th> <th>食味値</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>300m 未満</td> <td>39～50 日</td> <td>620～770°C・日</td> <td>1,000～1,260°C</td> <td>0～10%</td> <td>19～22%</td> <td>88～89</td> </tr> <tr> <td>300m 以上</td> <td>41～55 日</td> <td>510～620°C・日</td> <td>920～1,170°C</td> <td>0～12%</td> <td>23～24%</td> <td>85～90</td> </tr> </tbody> </table> 注) 2017, 2020, 2021 場内データ、2020, 2021 現地データ、整粒率は 80% (新 70%) 以上、精玄米歩合は 92% 以上を確保	標高区分	出穂後日数 (日)	出穂後有効積算気温 (°C・日)	出穂後積算気温 (°C)	青穂率 (%)	穂水分 (%)	食味値	300m 未満	39～50 日	620～770°C・日	1,000～1,260°C	0～10%	19～22%	88～89	300m 以上	41～55 日	510～620°C・日	920～1,170°C	0～12%	23～24%	85～90
標高区分	出穂後日数 (日)	出穂後有効積算気温 (°C・日)	出穂後積算気温 (°C)	青穂率 (%)	穂水分 (%)	食味値																	
300m 未満	39～50 日	620～770°C・日	1,000～1,260°C	0～10%	19～22%	88～89																	
300m 以上	41～55 日	510～620°C・日	920～1,170°C	0～12%	23～24%	85～90																	
10 その他	現行: 有機質肥料の施用について、2トン/10aまでの堆肥施用及び2トン/10aまでのレンゲ鋤込みは可。鶏糞は地域研究会での確認が必要 ※ 但し、速効性の窒素成分を多く含む堆肥を春施用する場合は、3割程度減肥する。 ⇒ 分施体系において、発酵鶏糞(窒素含有率約 4%)を基肥に 150kg/10a 程度施用することにより、収量確保が可能で、品質・食味にも問題がないことを確認(R6～7 年度)。但し、山間地では初期生育が緩慢となる可能性があるため、状況に応じて基肥の追加が必要な場合がある。引き続き鶏糞の効率的な利用方法について検討。	⇒ 改定 <u>鶏糞の基肥施用を可とする。</u> ※ 但し、資材の成分量を正しく確認し、鶏糞の肥効率は 50% で、分施の化成肥料の基肥窒素量と同程度の量を換算して施用する。 ※ 初めて施用する際は指導機関へ相談のこと。																					

※ 令和7年度版から記述が変わった部分を太字で示した。